

「 慰めは苦難の中に 」 ー使徒行伝講解説教 21ー

イザヤ書 40章 1節～2節
使徒行伝 9章 19節b～31節

説 教 本庄侑子 牧師

『教会は最も深く傷つく場所であり、しかし最も深く癒される場所です。』心に深く刻み付いた、一生忘れることの出来ないある牧師の言葉です。

サウロは、イエス様に出会って回心させられました。かつて、キリスト者たちを力の限り迫害していた彼自身が、今やキリスト者として、イエスこそ神の子であると力強く説きはじめました。そのためにサウロは、ユダヤ人たちから命をねらわれます。その陰謀を知り、夜の間ダマスコを脱出したサウロは、無謀にもエルサレムへと向かいました。

「エルサレム教会の仲間に加わること」が、サウロの目的でした。それは、苦難の中に自ら入っていくことでした。サウロは弟子たちの仲間に加わろうと努めますが、エルサレム教会は、かつての「迫害者サウロ」を信じて受け入れることができません。そこに心地良いもてなしや温かい交わりがあるはずもなく、人々の心には恐れや怒り、憎しみが満ちていたことでしょう。それでも、サウロはエルサレムに來たのです。それはサウロが、教会を信じていたからです。

前回お読みしたサウロの回心の場面で、イエス様は、「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか」(9章4節)とサウロに問われました。イエス様は教会を、そして教会にいるひとりひとりを「わたし」と呼ぶほどに愛しておられて、その教会を迫害するという、また教会にいるひとりひとりを裁くということは、イエス様を裁いているのと同じことだとはっきりと示されました。

わたしたちは信仰告白の中で『教会は主キリストの体にして、恵みにより召されたる者の集いなり』と口にします。教会は、イエス様ご自身、イエス様の体です。イエス様から受けた愛と赦しで、互いに愛し合い、また赦し合い、慰め合う教会をサウロは信じていました。主にある教会で、裁き合い責め立て合うためではなく、愛し合い赦し合うために、兄弟姉妹と共にあることを望んだのです。

エルサレム教会では、想像通り人々から受け入れてもらえず、恐れられました。覚悟をして向かっていった苦難の中で、自分自身の罪に震えて深く傷ついていたサウロに、イエス様によるとりなしの出来事が起こりました。バルナバという人物が備えられていたのです。

バルナバの本当の名前はヨセフです。しかし、使徒たちからは「慰めの子」という意味を持つバルナバと呼ばれていました。多くの人たちが、当然のように恐れや敵意を向ける中で、自分を信じ愛して行動してくれる人、この慰めに満ちた人はまるで、敵として背を向けていた自分のために命を捨て、その徹底した愛を示してくださったイエス様そのものでした。このイエス様のとりなしによって、サウロは使徒たちと会い、教会に受け入れられていきました。

かつて、自分が迫害していた人たちに受け入れられたうえに、なお、慰められ愛されていった出来事を通して、サウロの内によいよイエス様を信じて感謝する信仰、イエス様の教会を信じる信仰、そしてイエス様と教会を愛する愛が、強く増し加えられていったのだと思います。

教会生活を送っていると、私たちは確かに互いの罪によって、ぶつかり合うことがあります。そして、教会で受ける傷というのは、イエス様を信じて集まっている教会だからこそ、本当に深くなります。しかしまた、教会を信じる信仰を支えに教会に留まる中で、他のどこでも得られない深い癒しを経験することにもなります。教会は、イエス様を信じてても犯し続ける深い罪と向き合わされて、深く傷つく場所です。しかし、その罪を赦すためにも、十字架についてくださったイエス様の愛を受ける、そして深く癒される場所にもなるのです。

今日は、愛する兄弟のご遺体と共に礼拝を捧げています。いつも朝早く来て、礼拝で献金祈禱をする方の身長に合わせて、マイクの高さを調整するといった細やかな配慮をしてくださっていました。本当に教会を愛しておられた兄弟の姿を、ひとつひとつ今朝また思い起こします。この兄弟に、私もまた愛していただいたし、赦していただいた、その思い出が深い悔改めの思いを私にあたえてくださいます。

礼拝は、隣にいる兄弟姉妹と、また天と地にある全ての教会と同じイエス様の恵みに与り、イエス様の愛と赦しによって、結び合わされていることを思い直す時でもあります。争い悩む私たちの世界に、真の平和と和解をもたらすために、イエス様は十字架にかかって、私たちをここに呼んでくださったのです。

(記 説教要約奉仕者)